

自分の足元をしつかり固めて、大丈夫だよって言っ

てる姿を見せることが一番大事だと俺は思う。

語り手 對馬 慧(株式会社クレオテック) 聞き手 大林 孝太朗

*

現在

—よろしくお願いします。

お願いします。

—じゃあまず、自分の自己紹介からします。高校二年生の大林 孝太朗です。えーと、陸上部で、家は、その大阪の吹田にあつて。

遠い。

—遠いところから来てるんですけど、まあ結構慣れてきて、やっぱ、立守、良いところやなあって。立守、二時間かけてでも、その来る価値あるなつて最近思つたなつていう感じです。

中学上がり？

—いや、違います。

高校入学？

—高入です。じゃあ、えつとー、そのクレオテックっていう仕事は、そのなんとなくは分かつてるんですけど、詳しく教えていただきたいなと思つて。

立守におけるクレオテックの仕事でいうと、まあ、クレオテックつて会社から、それぞれその警備会社とか清掃会社とかに委託はしてるんだけど、それを取りまとめてる会社で、

—はい。

えーつと、今、受付にいらつしやると思うんだけど、受付さんもうちの委託の会社です。草刈りとかしてるのもクレオテック。用務員の仕事とか、機械の点検とか修繕とかの一時対応とかもだね。例えば空調壊れたつていうのが連絡入つたら、見に行つて確認して、業者に来てもらつて直してもらつとか、まあそういう学園の事務の方のお手伝いとか、学生の安全を守るため、警備とかそういうところに入つて。あの、入つてるつていうのもあれかな、まあそういうのを守るために仕事してる感じかな。ざつくりやけど。

—クレオテックつていう会社があるつてことですか

そう。これはクレオテックつていう会社です。

—ああそうなんですか。その立守だけとかじゃなくて？

立命館に全部ある。だからAPUもあるし、慶祥もあるし、宇治、守山とか、附属小学校も入ってるし、全部のところにクレオテックはいます。

—お、そうなんですね。

クレオテックつて会社は立命館が百パーセント出資している。運営元は、立命館さんなので、まあそこから委託みたいなのは、はい。こういう完全立命館の中でやってます。

—七年前ほどにその立守に来られたんですか？

そう。えーと、

—はい。

大学留年してたんだけど、卒業して、前職、クレオテック入る前に、ちよつと地盤調査の会社に二年半いて、転職でもしようかなあとなつた時に、縁あつてクレオテックに来た。で、いちばん最初に配属になつたのが、この守山。で、そこから四年間ぐらい働いていた。

―そーなんです。クレオテックのやりがいつて何ですか？

クレオテックのやりがいかあ。今はBK Cにいて、業務もいろいろ多岐にわたるからやつてること変わってくるんやけど。附属においては、まあ、先生とか、生徒とか、事務室とかと、なんていうのかな、直接的なやりとりがすごく多い。その中で、感謝されることもなきにしもあらず。そういうところにはやりがいつとか、自分の仕事の実感とかを感じてたかな。前は、なんかしてあげるとありがとうつて言ってもらうと、まあね、「やったか、やったな」つてなるから、まあそういうところは、やりがいつには繋がってたんじゃないかな。

―あの掃除してる人もクレオテックなんですか？

まあ、共栄薬品さんというクレオテックが委託してる清掃会社さんにはなるんやけど、元をたどれば学園とクレオテックの契約にはなるから、クレオテックが清掃をお願いしてる会社にやつてもらってるって感じかな。

*

立守について

―あー、なるほど。立守のいいところつてどこやと思いますか？

この立守？ えーとまあ先生方も温厚な方も、まあちよつと前のいた時の話になるけど、先生もいい方たくさんいらっしゃいましたし、まあ生徒も、あのーごめんね、これ表現がちよつと悪くなっちゃうかもしれないけど、すれてないというか。

―附属校ですしね。

そうそう、附属校で、まあ中学上がりがそのまま立命館守山中学から高校に上がってくる。この、まあ温厚な子も多いしね。まあ本当に昔の話になるけど、落書きとかガラス割れとかも少ないし。

―はい。

そういうところでいうと、生徒も穏やかな子も多いし、いいところじゃないかな。悪いこととかも起きてないかなと思うし。そういうことは守山の良いところかなと思います。

―やっぱ私立だからですかね。

そうだね。それはあると思う。

―自分も中学は公立だったんですけど、やっぱここ入って、なんかめっちゃお嬢様つて。

まあまあまあまあわかるよ。言いたいことは。

―なんていうのかな。めっちゃいい人多いなって感じてましたね。

だからそう、多分、高入生が一番、そういうのを実感すると思う。中学から上がつてるとずつとね、一緒に来てるから、クラス違えどね、顔見知りとか多いから。でも、他の中学から来るとまあ思うところあるよね。

―そう思いますね。あのあれですか？ 大学卒業してから、その地盤調査の会社。

あー、そうそう。

―それは何なんですか？

えつとまあ、あのごめん、自己紹介をしとこうかな。ごめんなさい。現在クレオテックで今はBK Cで働いてる對馬と申します。

―はい。

えーつと、転職してきて一番最初が守山で、それから六年間なんで、ほぼ十年前ぐらい、その前、大学は日大で。

―あ、そうなんです。

日大理工学部卒業して、まあ日大理工学部土木工学科だったんで、そのまま専門職の土木関係の地盤調査の会社に進んで、そこで営業マンしてたんやけど、クレオテックに転職してきて。

小学校から小中高大。まあ自分も立命じゃなくて日大の附属校だったの。日大中学、日大高校で日大。ずっと実家から通ってたんで、

で、社会人になっても通えるところだったから通ってたんだけど、そろそろ独り立ち、まあ一人暮らしが独り立ちってわけじゃないけど、した方がええかなって、やっぱ男としては思うところあって。だったら実家から二時間のところに転職するか、新幹線で二時間のところへ転職するか。だから関東人なのよ。

—あ、そうなんすね。

もう小中、日大なんだけど。だから関東に住んで。クレオの中に昔ちよつとお世話になった人がいて、それとの関係があつて。来てみないかって声かけてもらった。じゃあ、ちよつと受けて転職活動させてもらいますっていつて転職して合格してクレオテックになった。やっぱさ、ずーっと実家暮らしってなんか思うところない？ まあまあいいんだよ別に。小中高校までは別にいいし、大学までもいいと思うんやけど。社会人になって一人暮らし、いつかそう思うこともあるよ。

—やっぱ一人暮らしした方がいいですよ。

いいんじゃないかなと思う。別にそれが、長い期間だろうが短い期間だろうが、別にあれやけど、一回はやつといた方がいいとは思う。

*

過去の話

—幼少期の頃とかちよつと聞いてもいいですかね。
—どうぞ。

—えーとまず、兄弟は？

兄弟いないです。

—ないですか。一人っ子ですか。

一人っ子です。

—で、あれですか。あの、関東で生まれて。

生まれは。父親の転勤の最中に生まれたらしくて。

—あ、はい。

全然記憶もなんもないんで当然なんだけど、生まれただけでいうと、大阪の吹田で生まれたらしい。

—えー、そうなんですか。

いや、これマジ。大阪の吹田で生まれて、で、ちよつと親父がもう関東に戻った時に、一緒にね。だから育ちは、関東。生まれは大阪の吹田。

—ほんまに吹田なんすか？

ほんまに吹田。

—へー、めっちゃ偶然ですね。

だからまあまあ関東育ちです。だから未だに関西弁は喋れない。十年近く家にいるけど、ちよつとぐらいこうなんか、ね、流されてなまったりはするけど、普通に喋ってたらずつと標準語。

*

学生から

—学生時代、何部やっただんですか？

学生、中学が卓球で、高校はバドミントンやってました。大学はやらなかったかな。バイトに暮れてました。

—サークル入った方がいいなとかは別に感じなかったですか？

いやー、そこはね、あれだったんだけど、えっと、ちょっと日大の理工学部で、理工学部の校舎が千葉と東京にあつて、自分の行つてゐる学科が一年目が千葉で、二、三、四が関東という。

—そんな。

—そう、そう、そう。まあ千葉まで二時間かかるから、そこ一年目だけでサークル入つて、一年目つてやつぱり、ちょっと夢を潰すようで悪いんだけど、必修単位多いねん。

—あー、はい

基礎授業みたいなのが多いから、二回生に進んだ時に、その必修単位がありきの授業になつてくるから。それで、二時間通つて授業慣れない。その何、四五分授業から九〇分授業になつて、五限までやつて帰つて。普通になんもせずに帰つても八時とか考へるとサークル入る気になんなくて。

—あー、はい。

—なんか運動はしたかったけど、やめて。二年から移動になつて、その家からも近くて一時間ぐらいになつたんやけど、校舎が。二年から急にサークル入るつてなつた時に、なんだかな。

—確かにそうですね。

—つて思つて、気づいたら入らずに終わった。

—別に入らなくても。

—別に入らなくても、他になんかやることが、自分がやりたいことがあれば。自分はバイトしてたから。バイト楽しくて。店内の案内とか。それに明け暮れて、そこで人との、なんていうんですか、コミュニケーションじゃないけど、雰囲気とかも学べたしいかなと。

*

夢

—えっと、学生時代の将来の夢は何でしたか？

—学生時代の将来の夢。

—あんま考えなかったですか？

—そうだねー。いや、自分一人っ子で、ま、自分の父親が不動産屋で。—はい。

—漠然とは、それを継ぐのかなと思つていた。あのまあ自営業なので。不動産屋やけど、自営業だったから。

—そうなんですか。

—自分の父親の仕事を継ぐんだろうなつて漠然と思つてたから、将来の夢つていうのはあまり考へてなかった。なんだけど、まあ、やつぱり自分と親と話して、せっかく理系の土木工学科に進んだんだから、それを卒業するんだつたら、そのまま就職もそちのほう行つたほうがええんちゃう？ と、

—なるほど。

—いうことになつて。まあ、自分の父親は俺の会社なんか継がなくていいから、つて言われたから。

—へえー。

—会社つつつても本当に社員いないから。自分の父親だけで独立してやつてやるつだから。

—え、でもすごいですね。

—うん。だからもう好きなことやりつて言われて、

—はい。

—好きなことやつてきた。

—めっちゃ、いい家庭ですよ。そうなんですな。

だから将来の夢はあんまり抱いてなかったかな。言い方としては。

—なんで転職されたんですか？

—そうやね。前の会社は、まあその地盤調査の営業マンで、まあちょっと、言うのはちよつと、それも悪いんだけど、

—はいはい。

いろいろ、ね、ちよつとまあ何年以上も前だけど、上司とか、あの、なんていうの？ うーん。まあそれはね、えつとー、ハラスメントじゃないけど、結構きつい言い方をする人とかがまあザラにいたわけですよ。

—あーまあ、はい。

—ご時世的にね。

—はい。

でもまあ、そういう会社ではなかったんだけど、そういう会社寄りな会社ではあつて。まあその、伏せては欲しい、欲しいけど。建設業界とか、そういうのって、やつぱり昔ながらの親方とかはいるわけで。

昔は結構言い方は強かったりするんやけど。それもまあ、まあ、まあ、まあいいでしょうって感じだったんだけど、飲み会が多くてさ。やたらと週二ぐらいで飲むみたいなの。その人たちに關しては強いんだ。酒が。飲み歩いてきたじゃん。で、自分は酒飲めなくて。酒飲めなくて営業マンで、営業マンはまあ相手にお酒を注ぐみたいなの、昔の風潮的にね。で、注いで飲み会で仲良くなるみたいなの。風潮があつて、あーちよつと自分には合っていないのかなーと。営業成績は悪くなかったんだけど。全然やつてもいいけど、他の企業、会社に移動してもいいかなって時に声かけてもらったから。うちの会社来てみないかっていう話があつたから、転職活動しました。

＊

人生で一番感動したこと

—今までで一番感動したこと。体験とか。何ですかね。

—まあ、あんまない、ないっていうとあれやけど、ないかな。

—ないですか。

—難しいけど。なんかある？ 難しいくない？ 感動したことって。映画見て感動とかさ、ザラにあるけど、一番つていわれるとあれやんか。

—自分はここ最近でいうと、まあ親が手術成功したことかなとは。おー。

—最近起こったからまあ思うんですけど。

—そうやね。それは一番いいことだわ。

—その、自分、親がどつちもだいぶ歳で。

—そうなんや。

—だいぶ歳離れてて、お母さんが四十の時に自分のことを産んで、今五十七とかなんですけど。

—結構離れてるね。

—はい。つて考えると、その自分が養つてかなあかなっていう、ちよつとプレッシャーはあつて。その長く生きて欲しいけど、その一人っ子やし。

—分かるよ。でも、まあ俺も状況ほら一人っ子で、親と話してて、状況同じやけど、まず一番大事にしなきゃいけないと思つてゐることは、自分の足元をしっかりと固めて、大丈夫だよって言つてゐる姿を見ることが一番大事だと俺は思う。

—なるほど。確かに。

それはいずれね、その介護とか、なんかしてあげないとか、してあげたいとかいうのは出てくるとは思うけど、ね。今回、全然関係ない話になっちゃうと思うけど、自分がしつかりしてるよと、だから安心してこれっていう姿を見せるのは大事だと俺は思ってる。その状況次第ではなっていくけど、まずは自分がしつかり独立してるよ、安心してくれと。ま、心配してあげる姿も絶対必要だけど、そこは。

―やっぱ自分も高校生なんで、親と喋る機会も減ってて、お母さんと喋ってたりますと、やっぱ腹立つ部分とかも多くて。そういう時どう喋ったらいんですかね。なんか自分で思うこともやっぱあるんですけど、最近ではできるだけムカついても出さずに、そうしていいのかなとか考えられたりするんですけど。

それは考えられるだけで大人になった証拠だと思うよ。

―やっぱそっちの方がいいですね。

だけど譲れない部分、譲りたくない部分絶対あると思うから。そういう時は感情をあらげないでちゃんと会話すること。普段からの会話って絶対そこから発生するから。うわむかつくわ、ちょっと一週間ぐらい喋らんとことかではなくて、細かく細かく。普段から話すことであれば、その会話の最中に解決することだってあるし。

*

これからの展望

―えーっと、これからしてみたいこととかありますか？

いやー、夢というか。夢はあったのに。やっぱあったってのも変なんだけど。サグラダファミリアを見たくて。スペインに行つて、サグラダファミリアが見たいっていうのは多分中学からずーっと私の友人にはずっと言ってる。それが、八月に行くことになりました。叶います。

夢は叶います。

―いいですね。スペイン。

そう、八月の一四日からちようど行くので。夢を叶えます。

―自分もめっちゃスペイン行きたいんですよ。サッカー好きで。スペインのサッカー見たいっていうのと、やっぱヨーロッパ行ってみみたいです。

そう、俺も海外旅行っていうのは全然したことなくて。ちよっと去年かこの間くらい韓国行ってきたけど。なんやけど全然その旅行の経験とかないし、アメリカとかそういうところも、ハワイとかね。よくみんなが行くようなところ行ったことないし。ずっと怯えてたんだけど。だから多分死ぬまでに本当に一度見たいと思ってたんだよ。サグラダファミリア。なんだけど、友人が行かねえかと話になって、すごい旅行行ってるたまたま友人がいて。その人で行ってきます。

―スペイン語喋れるんですか？

あ、全然。一応通話アプリとかも入れるし。あとはなるようになるでしょうと。

*

人生について

―ああ、はい。なんとかなる。そうですね（笑）。今後の人生で大切にしたいこととかありますか？

人との関係性。えーっと、大人になれば大学時代から薄々感じてくると思うけど、友達は増えることはなくなります。減ることはあっても増えません。

―あ、はい。

あの、いや、それはね、会社で同い年ぐらいの同僚。

―あー、はい。

同僚はできる。でも、友達、表現もあれだけど、友達。まあ確かに一緒にご飯とか行くけど、休日とかに遊びに行く？ ってまあ行こうと思えば別に行けるんだよね。行きましようって言ったら行くけど。でも親しい友達の間で友達っていう言い方。友達にはなる。でもすごい親しい友達っていうのはできづらいと思う。うん。出会いの場ではないから。もう仕事場だから。

―あー、確かに。過去に戻れるならいつ戻りたいとか？

ないです。

―ないですか。今のまま？

うん。

―後悔がない人生なんです。どんな老後を過ごしたいですか？

えー、積み上げたゲームを消化する穏やかな老後を。わかんないけどね。

―はい。

そう、いや、まあでも穏やかな老後は過ごしたい。なんかいろんなところ行ったり、いろんなことできたらいいな。

―いつか結婚してって感じですか？

そうです、うん。

―世の中がこうなってほしいとかいう気持ちとかありますか？

あー、若者に負担がかからない世の中になってほしいかな。年金問題ってわかる？

―はい。

今の人が一人に対して一人の老人を支えていますと。で、時間が進むと一人の人で三人の老人を支えますと。

―あ、はい。そうですね。

ってなっていくと申し訳ないなと思う。かわいそうだなと思う。

―だんだん子供って減ってますもんね。

そう、だからその、ね、逆三角じゃないけど。

―はい。なっていくわけですね。

なっていくと、そんなに働けなくて年金受給者が増えてくると。自分三六だからあんまりそんなこと言っても怒られそうだけど。まだ早いんじゃないかねえかと言われそう。

―まだ早いですよ。死ぬ前に必ずしたいことってもうアレですか？

そう。死ぬまでに必ずしたいことは、サグラダ・ファミリアを見ることです。

―そんなあれなんです。めっちゃ。

めっちゃしなかった。めっちゃ。もう中学校からかな、なんかずっと言ってる。やっぱ現実で見てみたいっていう。

―あれってもう完成したんですか？

まだ、未完成。

―まだ。あれ何年後とかってありました？

2030年ぐらいには完成するとかいう噂。

―まだまだですね。じゃあ、人生とは何か、一言で表すとなんですかね。

一言で表すと。難しいなあ。あー。何言っても角が立つな。人生とは一言で言うと、まあ、色んな「選択」じゃないですか。あの、これを選ぶっていう選択を、自分がこうしたい、あれをこうしたいとか、もう友達と話してこれを決めるとか、いろんなことを決めてって、それについてやっていくから、一応選択じゃないですか。

―なるほど。あ、最後になんで今回の聞き書きにそのやりますって言うてくれたんですか？

うん。ま、ちよつとオフレコの話とちやんとした話があるんだけど、オフレコの話でいうと、このクレオティックの守山の事業所ってだいたいの責任者と社員、その下の部下、分かれて、ずつと私は部下に当たるところだったけど、責任者の方に最初声をかけたけど、責任者の方が定年を迎えて連絡が取りづらくなった。それで話が向いたのが私だったっていうのがまず一つと、守山も自分が転職してきて一番最初のところで思いうちもあるし、こういう機会だし。なんか声をかけてもらったら、渡辺先生からなんだけど、声をかけてもらって嬉しかったから参加しました。―ありがとうございます。

はい、ありがとうございます。もう時間ごめん。結構経っちゃった？
―いえ全然。

【感想】

―今回の聞き書きでは、立命館守山に携わっていた人の人生を聞くことができた。親を心配させないような生き方の話がとても印象的だった。自分はこれから自分一人だけで生きていけるということを親に見せることが一番安心させられるんだと思いながら精一杯生きていこうと思った。



左：語り手 對馬 慧 さん
右：聞き手 大林 孝太郎